



March 2004

KIWC newsletter

2004年は姉妹湿地（釧路地域のラムサール湿地—オーストラリア・クーラガング湿地とその周辺湿地）提携10周年です。

CONTENTS

- ラムサール条約釧路会議10周年記念事業 ----- 1-3
- 釧路湿原再生協議会への参加 ----- 3
- JICA（国際協力機構）関連の事業 ----- 4
- KIWC技術委員会の活動報告 ----- 4
- 日本のラムサール登録湿地（シリーズ13） ----- 4



（こども作品展示作品より）
クシロハナシノブ
阿部 美咲（小4）

ラムサール条約釧路会議開催10周年記念事業

2003年は1993年のラムサール条約第5回締約国会議が釧路で開催されてから10年の節目となる年でした。10周年を記念し、KIWCではさまざまな事業を数多く実施しました。

「釧路湿原エコツアー」の実施（釧路湿原自然再生大会企画）

ラムサール条約釧路会議開催10周年を記念し、2003年6月20日～22日に、釧路市において「釧路湿原自然再生大会（主催：釧路湿原再生大会実行委員会）」が開催されました。KIWCもこの大会への企画事業として、地域住民対象の「釧路湿原エコツアー」を6月15日に実施しました。小学生から高齢者までを含む参加者25名は、釧路湿原の東側にあるシラトコ湖周辺の森林と湿原を訪れ、存分に楽しみました。晴天の中、初夏の自然を五感すべてを駆使して感じとるプログラムや、カヌーの上からの釧路川の観察などは、参加者から「来てよかった、また参加したい」と大変好評でした。



公開座談会「トーク・TALK釧路会議」「市民交歓会」の開催

10年前のラムサール条約釧路会議をふりかえりつつ、今後の湿地保全のありかたを考える公開座談会が、2003年7月22日に釧路市観光国際交流センターにて開催されました。語り手として、当時の同会議副議長であったL.メイソン氏（アメリカ）と、道東のラムサール湿地の姉妹湿地であるオーストラリア・クーラガング湿地の保全に取り組んできた、ウェットランドセンター・オーストラリアの理事長、C.ブリエット氏を招き、KIWC技術委員長の辻井達一氏をホストに、意見の交換を行いました。

座談会では、同会議を成功に導く大きな力となった「あらゆる場面で地域住民の参加と協力」が、会議開催をきっかけに世界に広まり、その後のラムサール条約においても、ますます重要視されている状況が語られました。

会場には約90名の市民が訪れました。座談会終了後にひきつづき開かれた「市民交歓会」では、会議当時の記録ビデオの公開も行われ、懐かしい場面に歓声もあがっていました。



国際ワークショップ

「ラムサール湿地の賢明な利用—ラグーン湿地に注目して」の開催

2003年7月23日、釧路市観光国際交流センターにて、ラグーン（汽水湖）湿地の賢明な利用について、国内外の取り組み事例の紹介と今後の課題について考える国際ワークショップが開かれました。ラムサール条約釧路会議開催10周年を記念し、ラムサール湿地ワユス開催実行委員会の主催により開催されたものです。KIWCは主催者の構成団体として、この会議に参加しました。

会議にはアジア地域を中心に13カ国より110名が参加、昨年開催された第8回締約国会議において、ラムサール賞を受賞したインドのチリカ湖における湿地再生事業をはじめ、数多くの事例が報告されました。また、ラグーンの保全と修復や、自然資源の賢明な利用などの解決について意見がかわされ、その成果が「会議声明」として採択されました。



ラムサール条約釧路会議10周年記念事業



国内学生実習「釧路湿原フィールドスタディ」の実施

2003年8月25日から28日にかけて、大学生を対象とした環境教育実習「釧路湿原フィールドスタディ」を行いました。3大学22名の大学生/関係者が、釧路湿原とその関連施設において、自然観察やエコツアー、ネイチャークラフトなど、体験実習の多彩なプログラムを通じて、釧路地方の自然を肌で体験し、環境保全の大切さや保全への課題などについて学びました。

財河川環境管理財団 河川整備基金の助成により実施されました

ミニ講演会

「川から見るイタリア・ローマのまちづくり」開催

2003年9月16日（火）に釧路市交流プラザさいわいにて、講演会「川から見るイタリア・ローマのまちづくり」を、（財）河川環境管理財団の後援のもとに、釧路市とKIWCの主催で開催しました。

講師にローマ大学建築学部教授であるバオラ・ファリーニ氏、コーディネーターにKIWC技術委員長でもある北海道環境財団理事長の辻井達一氏を迎え、古代ローマの昔から人々の暮らしに多目的に利用されてきたイタリア・テベレ川について、その概要や現在進められている河川計画などを解説していただきました。テベレ川の流域に位置するローマでは、都市計画における河川の役割を、通運、観光資源、水源、そして緑地をつなぐ「回廊」など、さまざまな面からとらえ、重要な地域資源としてまちづくりに役立てています。ローマの例を参考に、約70名の参加者は、釧路のまちづくりにおける釧路川のありかたについて想いをめぐらせました。



河川環境観察会の実施

2003年10月18日（土）、釧路川の水质と環境について学ぶ観察会を、（財）河川環境管理財団 河川整備基金の助成により、釧路湿原国立公園連絡協議会との共催で実施しました。この観察会は、同協議会所属のこどもレンジャーと、エコツアーに関する研修のため釧路を訪れていたJICA研修員を対象に企画され、約30名が参加しました。

一行はまず釧路川の源である屈斜路湖を訪れ、ラフティングボートで釧路川上流を下りました。水の透明度が高い源流部でアメマスなどを観察したのち、塘路湖で手作りの箱めがねによる水中観察をおこないました。さらに、塘路湖からはカヌーによる釧路川中流の川下りを体験し、オジロワシやカワセミなど、多くの野生生物を身近に観察することができました。参加者はこの観察会をとおして、釧路川の豊かな自然と、河川環境の流域による水の様子の違いなどについて学びました。



国内ツルワークショップ、市民フォーラム「ツルの未来」の開催

2003年11月14日から16日にかけて、国内ツル類保護の関係者ら約30名による「北東アジア地域ツル類重要生息地ネットワーク・国内ワークショップ」が、日本野鳥の会主催、KIWC共催で開催されました。会場の釧路市観光国際交流センターでは、日本で繁殖、もしくは越冬するツル類の現状報告や、過密化や感染症の問題などが紹介され、生息地が抱えるこれらの課題の解決に向けて、情報や意見の交換が活発におこなわれました。

最終日の16日にはラムサール条約釧路会議10周年事業の一環として、一般市民を対象にしたフォーラム「ツルの未来」も開催されました。約70名が参加し、ツルの生息地の現状や保護活動の現在、そしてツル保全のための、北東アジア周辺諸国も含めた「ツル生息地ネットワーク」による連携の重要性について、専門家による講演と、一般参加者を交えた討論会がおこなわれました。



KIWCホームページ「こどものページ」開設: <http://www.kiwc.net/child/>

KIWCホームページに新しく、日本語・英語版対応の、子供向けのページが開設されました。湿地の保全やラムサール条約について「湿地ってどんなところ?」から、総ルビつきでやさしく解説した、画像満載のページです。国内外の子供たちの自由研究や総合的な学習などの資料として、また、学校関係や湿地に関心のある大人の方にも、さまざまな機会を活用していただきたいと考えております。なお、このページの開設を、2004年の「世界湿地の日（2月2日）」への参加企画としてラムサール条約事務局に報告しました。



「ラムサール湿地保全国際こども作品展」の開催

2003年11月14日から2004年2月24日にかけて、KIWCを構成する6つの市町村（釧路市、釧路町、標茶町、厚岸町、浜中町、鶴居村）を巡回する「ラムサール湿地保全国際こども作品展」を開催しました。上記市町村の各公施設を会場に、釧路地域の小中学生の「湿地」をテーマとした公募作品、および内外の湿地保全に係わる団体機関より寄贈いただいた中国、韓国、リトアニアの子供達による書画の、合計約130点を一般展示しました。ジャンルを問わない平面作品の募集に対し、絵画や自由研究ポスター、写真、作文などのバラエティに富んだ力作が寄せられ、会場を訪れた人々の関心をひいていました。今後KIWCホームページなどでも、これらの作品を順次紹介する予定です。

「ラムサール湿地保全国際こども作品展」展示作品より

「日本一の釧路湿原とたんちょう鶴」 小学6年 池田 希利

「あつ、鶴がきた。」
こは、釧路湿原。たんちょう鶴は、春の間湿原の中で、赤ちゃんをうむそう。そして、夏には、湿原の中で、お父さんと、お母さんに赤ちゃんの鶴は育てられる。そして冬になるとえさをもらうことができる場所に姿を現す。私は秋と冬に何回か鶴を見たことがある。
「きれいだー。」
と思った。そんな鶴の巣の数は45か所、釧路湿原にあるそうだ。釧路湿原は、日本一大きな湿原で釧路市、釧路町、標茶町、鶴居村にまたがっているそうだ。
私は4年前に、釧路に引っ越してきた。それまでは釧路湿原のことも、知らなかった。けれどもこの4年の間
「ここでしか見られないものを、たくさん見せてやるよ。」
とお父さんが言い、少し湿原のこと、たんちょう鶴のことも知った。そして、わからないことは展望台や博物館で調べた。
私は、今、日本一大きな釧路湿原の近くに住んでいて、良かったと思っている。東京にいた時は、知ることを見ることもできなかった大自然が手をのばせるところにあるのだから。けれども、昔にくらべると、湿原も減ってきている。開発が原因のようだ。そしてたんちょう鶴が、電線などに引っかかって、死んでしまうことも増えてきている。私は、この釧路湿原がいつまでもきれいなまま残っていてほしい。そしてたんちょう鶴がゆっくり子育てをして、ゆっくり住むことができる湿原であってほしい。だから鶴たちを見る時は、静かに、優しく心で見守っていたい。



夕日と釧路湿原 飯並 円佳(小2)



やちぼうずの一日 大塚 詩穂(小3)

「冬のエコツアー」実施

釧路湿原にて2004年2月24日、一般市民を対象とした「冬のエコツアー」を主催しました。幼児、児童を含む14名の参加者は、SL「冬の湿原号」でJR釧路駅を出発し、雪におおわれた湿原の中で、動物の足跡や木の様子などを観察しました。また、細岡ビクターズラウンジで、釧路星園高校の柳教諭によるペットボトル内での雪の結晶づくりの実験披露なども行われ、参加者たちは、寒い冬にしか見ることのできない湿原の自然について楽しく学びました。



湿原の顔～身近な自然 太田 佳穂(小4)

「アジア湿地週間」イベントへの参加

アジア地域の湿地保全に関わるNGOの国際会議、「アジア・ウェットランドシンポジウム」では、世界湿地の日である2月2日から、2月8日までの1週間を、「アジア湿地週間」と定め、湿地の保全と賢明な利用に関するさまざまな普及啓発活動を実施しています。この活動の一環として、東京都にある湿地保全NGO「ラムサールセンター」が主催した「アジア湿地週間子どもと湿地」キャンペーン2004に、KIWCも浜中でのこども作品展を、期間中のイベントとして参加しました。

釧路湿原再生協議会への参加

釧路川流域の経済活動の拡大に伴い、面積の減少や植生の変化が近年著しい釧路湿原を、再生・修復させるための取り組みとして、2003年11月に地域住民、NPO、NGO、地方公共団体、関係行政機関、専門家などで構成する「釧路湿原自然再生協議会」が、同年に施行された自然再生推進法に基づき設立されました。KIWCもこの協議会に、団体として参加することになりました。

2003年度JICA湿地環境及び生物多様性保全研修コース実施

2003年5月26日から7月2日まで、JICA（国際協力機構・旧国際協力事業団） 集団研修「湿地環境及び生物多様性保全研修」がJICA北海道国際センター（帯広）を研修実施機関、環境省自然環境局およびKIWCを受け入れ機関として実施されました。

最終回となる今年度は、南米・アフリカより6カ国8名の、環境保全や自然保護に係わる研究、教育機関関係者と行政中堅専門技術者を迎えて、日本の自然保護行政の紹介、実践的な調査・モニタリング手法、環境教育・エコツアー体験など、多岐にわたる内容のカリキュラムを実施しました。

沖縄諸島から北海道まで、日本列島の多様な自然環境とその保全の方法を学ぶ研修となりました。また、市民ボランティアによるホームビジットや、釧路市立武佐小学校による学校ぐるみでの「環境教育と国際理解」プログラムへの協力参加など、研修中のさまざまな場面において国際交流が行われました。

JICA自然公園の管理・運営と利用研修

2003年9月16日から10月25日まで、JICA「自然公園の管理・運営と利用研修」がJICA北海道国際センター（帯広）を研修実施機関、KIWCを受け入れ機関として実施されました。集団研修として2回目となる今年度は、7カ国8名の、自然公園の環境保全に係わる行政中堅専門技術者を迎えて、体験実習を主体とした日本国内でのエコツアー事例の紹介や、自然公園制度やエコツーリズム理論に関する講義、環境教育現場の視察など、自国におけるエコツーリズムの導入と活用に関与する、さまざまなプログラムを実施しました。また、自然資源だけでなく文化遺産を利用したエコツアーについても学んでもらうため、今回は古都京都にも足をのびました。

釧路での研修中に平成15年十勝沖地震が発生するハプニングにみまわれましたが、さいわいにも全員予定通り、無事に研修の目的を達成することができました。

KIWC専門家のブータン派遣

2003年12月16日から12月25日にかけて、ブータンのフョブジカ湿地と同湿地に生息するオグロツルの保全に関する調査のため、KIWCの専門家が現地を訪れました。JICAの草の根技術協力事業（地域提案型）のための事前確認調査として実施されたものです。調査の結果、翌2004年の3月に、同国の王立自然保護協会の職員2名が道東にて、KIWCの実施するJICA「フョブジカ谷におけるオグロツル生息湿地の保全にかかわる環境教育等の実施・運営」研修に参加することになりました。同協会はフョブジカ湿地の保全活動を中心となって進めているNGOです。

KIWC専門家のマレーシア派遣

2004年2月2日から2月15日まで、JICAの実施するマレーシア・ボルネオ生物多様性・生態系保全プログラム協力のため、KIWCの専門家がマレーシア・サバ州に派遣されました。クロッカーレンジ国立公園をはじめとする、同地域の自然公園を視察し、ビジターセンター等の展示計画や公園の整備などについて、助言を行いました。

日本のラムサール登録湿地 シリーズ13 藤前干潟

太平洋に面する伊勢湾の奥部にある藤前干潟は、庄内川・新川・日光川の河口に広がる約200haの干潟で、名古屋市の南西部に位置します。

この藤前干潟は、シギ・チドリ類の東アジア～オーストラリア間の渡りルート上の中継地であり、シギ・チドリ類が1万羽以上飛来するなど、国内でも有数の渡来地となっているため、2002年11月18日に、干潟の周辺部を含めた323haがラムサール条約の国際的に重要な湿地として登録されました。かつて、伊勢湾奥部にたくさんあった干潟のほとんどが埋め立てられ、港湾施設や工場などに変わっていき、この藤前干潟もその一部を名古屋市のゴミ処分場として埋め立てる計画がありました。

この計画が市民運動と行政の判断によって中止され、干潟を保全していくこととなったと同時に、市民と行政が一体となってリサイクルなどの積極的なごみ減量のための取

り組みが始まったのは今から5年前のことでした。

その結果、名古屋市内から出るごみの量が、取り組み前に比べて約3割削減されたのです。藤前干潟は渡り鳥にとって重要であるだけでなく、名古屋市民にとっても消費型社会を見直すきっかけとなった象徴となる場所にもなったのです。

現在、環境省が中心となって藤前干潟の周辺に環境学習などの拠点となる施設整備を進めるなど、藤前干潟の保全活用を目指した検討がされているところであり、具体化するまでにはもう少し時間がかかるといえます。

名古屋市民としても、大都市に残された藤前干潟を市民の貴重な財産として保全していくため、その重要性を広くアピールしていくとともに、保全活用に向けた取り組みを積極的に進めていきたいと考えています。（名古屋環境局環境都市推進課）



KIWC技術委員会・現地検討会の実施

2003年8月22日、KIWC技術委員とKIWC構成団体関係者により、2001～2003年度の研究テーマである「湿地の修復・再生」に関する現地検討会が、おこなわれました。（財）日本野鳥の会の釧路湿原で実施している、タンチョウ生息環境（ヨシ原）復元事業の現場視察を行ったほか、湿原内を流れる小河川にてイトウの産卵床跡を視察し、釧路湿原におけるイトウの生息環境の現状確認を行いました。各視察の現場では、湿地を再生・修復し、タンチョウやイトウなどの希少生物が生息できる環境を確保するための必要条件や、今後の課題などについて、委員による討議がおこなわれました。

研究の成果は2003年度終了時に報告書にまとめられ、関係機関に配布されます。

